非行少年と普通少年の意識の差異について¹

富 山 大 学 村 上 宣 寛

The mentality differences between the delinquent and non-delinquent boys

Yoshihiro Murakami (*Department of Educational Psychology, Toyama University, Toyama 930*)

The purpose is to explore the mentality differences between the delinquents and non-delinquents by sixty-item questionnaire. Subjects were 41 delinquents in the reformatory and 86 high school boys. In the first analysis, principal factor and geotax rotation were applied to these items, which yielded sociability, self-esteem, and will-power factors. ANOVA of scores on these three factors classified two groups well. In the second analysis, oblique geotax rotation as applied to the two groups separately. The data of delinquents yielded five factors, characterized by problem behavior and timidity, while the data of non-delinquents yielded three factors. The similarity of structure between the two was low, when the best matching solutions were considered as criteria.

Key words : juvenile delinquents, high boys, factor analysis, best matching solution.

非行の心理発生論を検討するには、非行少年と普通少年の心理構造の比較を行えば良い。古くは Burt (1938) が犯罪者の 85% は情緒的に問題があると主張した。また、Healy & Bronner、樋口訳 (1936) は同一家庭内における非行少年と非行のない少年各 105 名の比較を行い、非行少年には人格異常、情緒障害、活動過多、不安が多く観察され、情動的不満をもつものは 91% を下らないが、非行のない少年では 13% にすぎないと主張した。しかし、診断に当たった精神科医やソーシャル・ワーカーが研究仮説に影響されていること、主観的な方法で診断がなされ、客観化の努力が払われていないことなど、問題点が多く、彼等の結果をそのまま受け取ることとはできない。

本研究の目的は非行少年と普通少年の意識の差異を明らかにすることである。先行研究を振り返っても、非行少年と普通少年の比較はじゅうぶん意識的に行われているとは言えない。例えば、上田・玉瀬・相崎 (1967) は、非行少年と普通少年の自己概念の比較を行い、その結果、非行少年は現実自己と他者自己との食い違いが大きいこと、SD 尺度でより肯定的かつ極端な反応をすることなどを明らかにした。しかし、2 集団の間で有意差があった尺度は少なく、また、SD 尺度での極端な反応傾向も新しい発見とは言えない (例えば、Heise, 1969)。

青木 (1980) は 133 の不合理な事態の陳述項目を用いて非行少年および普通少年に回答させ、因子分析の結果、8 因子を見出し、個人の因子得点を算出した。群間の差を因子得点で比較しているが、有意差の検討がなされていない上、2 集団間で回答率の差のない項目まで含まれているため、負の情緒一般を記述する因子を見出しただけである。非行少年と普通少年の意識の差異が見出されたとは言えない。

宮野 (1981) は、社会的自己、意志、自己評価の 3 要因を用いて 64 の陳述文を作成し、矯正処遇群、非行群、正常群に Q-分類させた。分散分析の結果、非行群は正常群と比べて、反社会的、かつ否定的な自己概念をもつこと、意志が堅すぎるか、弱すぎるかのどちらかであること、矯正処遇群は非行群と同一の傾向を示すことを示した。しかし、非行少年と普通少年の意識の違いが以上の 3 要因に限られるという保証はない。

一方、宮下・小林 (1981) は疎外感尺度を作成し、青年期における発達の変化と適応との関係を研究し、その中で、問題児群が正常児群に比べて、疎外感のすべての下位尺度で有意に高い得点を得ることを示したが、これも尺度の作成が主な目的であり、非行少年と普通少年の意識の差異に焦点を当てた研究ではない。

方 法

被験者 非行群は石川県の少年院で矯正処遇中にある少年 41 名の男子であった。年齢は 14 歳から 19 歳の範囲であり、平均年齢は 17 歳であった。なお、この少年院は非行が比較的軽度で、早期改善の見込みのあるも

¹ 本研究は、近藤小百合 (西田地方小学校) の卒業論文のデータを本人の了解を得て、村上宣寛が再分析、論文の執筆を行ったものである。なお、すべての分析は、パーソナル・コンピューター PC-8801 システムによって行った。

のを対象としていて、実際の在院期間は4—5ヵ月である。少年院によると、1) 知的に劣る者はほとんどおらず、6割は高校進学歴がある、2) 収容者の8割以上は無免許運転の経験者である、3) シンナー等の吸引経験者は8割以上、4) 経済的には中流以上だが、親子のきずなは弱く、快楽追及型が多い、とのことであった。なお、無非行群は平均年齢が17歳の富山県の男子高校生86名であった。知能、経済水準などは非行群と同等であると思われる。

質問紙 質問項目は、宮下・小林(1981)、宮野(1981)、CPI、および、田研式問題行動診断テストから、非行群と無非行群の弁別に役立つと思われるもの60項目を選定した。内訳は、1) 疎外感 宮下・小林(1981)より孤独感および自己嫌悪感に関する各5項目、2) 社会的成熟性 CPI より10項目、3) 責任感 CPI より7項目、問題行動診断テストより3項目、4) 自己統制力 CPI より10項目、5) 順応的な成就欲求 CPI より10項目、6) 意志力 宮野(1981)より10項目、であった。なお、調査は無非行群の場合、少年院の教師、無非行群の場合、各クラスの教師によって行われた。

分析手続き χ^2 検定によって両群間に差の見られる項目を抽出し、その後、2つの分析を行う。分析Iは因子構造が両群とも同一であるという仮定のもとで、全群一括の主軸法による因子分析、ゼオマックス回転を行い、被験者の因子得点を求め、1要因分散分析および t 検定を行う。分析IIでは非行群、無非行群ごとに因子分析、斜交ゼオマックス回転を行い、群ごとの因子構造の特徴を抽出する。

結 果

項目の有意性検定の結果

非行群、無非行群に60項目の質問紙を実施し、 χ^2 検定を行った。有意水準を5%レベルとすると差のある項目が18しかなかったため、有意水準が10%レベルまでの24項目を以後の分析で用いることにした。質問項目、準拠した要因、および、 χ^2 検定の結果をTable 1に示した。

分析Iの結果

全群一括のデータをもとに項目間の積率相関を求め、SMCを共通性とし、主軸法による因子分析を行った。固有値は、2.60、1.64、1.27、0.86と減少した。固有値の減少傾向からは明確な因子数は定められないが、3因子目のアルファ係数が0.22で、4因子では負になることから因子数を3と定めてゼオマックス回転を行った。結果はTable 2に示した。

因子1は、2. どうせ私には何もできないのだから、社会のことなど思いわずらってみてもしょうがない、19.

自分の目的達成のためには周囲の者が迷惑をうけてもやむをえない、22. 自分が失敗しても、失敗は自分のせいではないと思う、14. 約束をまもらないことが多い、などに関係している。対人関係での協調性を記述していると思われる。ここでは社会性の因子と命名しておく。

因子2は、5. 私には本当に理解しあえる人はほとんどいない、に負の大きな負荷量が、20. 私は何かができる人間である、13. 私は有能な可能性に富む人間である、8. みんないつも暖かい心で私をむかえいてくれる、などに正の大きな負荷量をもっていた。有能であり、かつ、理解されているという自己意識を記述している。ここでは単に自尊心の因子と命名しておく。

因子3は、7. よくないことだとわかっていても、ついスリルに魅力を感じてしまう、4. 友達からさそわれるとついよくないこともしてしまう、15. たとえそのことで将来損することがわかっていても現在楽しいことならたいていする、などに負の大きな負荷量をもっていた。スリルや誘惑に対する意志の強さを記述していると思われるので、ここでは意志力の因子と命名しておく。

因子得点は真のスコアの最小自乗推定値(芝, 1979)によって求めた。因子得点をもとに1要因分散分析と t 検定を行ったところ、因子1については、 $F_{(1,120)}=5.28$, $t=2.32$, $p<.05$ いずれも5%水準で有意差が認められた。因子2については、 $F_{(1,120)}=16.04$, $t=4.04$, $p<.01$ で、いずれも1%水準で有意差が認められた。因子3については、 $F_{(1,120)}=48.63$, $t=7.03$, $p<.01$ でいずれも有意差が認められた。

分析IIの結果

無非行群の結果 無非行群のデータのみをもとにして相関行列を作成し、共通性としてSMCを採用し、主軸法によって分析した。その結果、固有値は、2.96、1.62、1.38、1.10、0.89と減少した。わずかであるが、減少の度合いが3—4因子にかけて大きいこと、3因子目ではアルファ係数が.29であるのに対して4因子目で.10となることを考慮にいれて、因子数を3と定めて、斜交ゼオマックス回転を行った。因子パターンの結果をTable 3に示した。斜交回転ではあるが、因子1と2に.34の弱い相関があっただけで、因子はほぼ独立していた。また、分析Iの因子との一致係数をTable 4に示した。

因子1は、20. 私は何かができる人間である、13. 私は有能な可能性に富む人間である、7. よくないことだとわかっていても、ついスリルに魅力を感じてしまう、4. 友達からさそわれるとついよくないこともしてしまう、に大きな負の負荷量をもつほか、21. 大ぜいの人の前で話をするを考えただけでも、気おくれる、5. 私には本当に理解しあえる人はほとんどいない、4. 友達からさそわれるとついよくないこともしてしまう、な

Table 1
A portion of the questionnaire used in this study, which showed
significant differences between the juvenile delinquents
and high school boys

Item	Factor	Chi-square
1. うちとけて話ができる人はあまりいない.	loneliness	5.91*
2. どうせ私には何もできないのだから, 社会のことなど思いわずらって みてもしょうがない.	loneliness	5.37*
3. 他人から“仲間はずれにされている”と感ずることはまずない.	loneliness	5.63*
4. 友達からさそわれるとついよくないこともしてしまう.	will power	15.76**
5. 私には本当に理解しあえる人はほとんどいない.	loneliness	4.70*
6. 私たちは, 自分の国のことだけを考えて, 他国のことは他国にまかせ ておくべきである.	responsibility	11.64**
7. よくないことだとわかっているけど, ついスリルに魅力を感じてしまう.	will power	20.09**
8. みんないつも暖かい心で私をむかえてくれる.	loneliness	4.30*
9. その場のいきおいで行動してしまって, 前もってゆっくり考えないこ とが多い.	socialization	3.91*
10. 自分をかなり犠牲にしても, 老いた両親のめんどろをみるのが人の 本当のつとめだ.	responsibility	4.65*
11. 何かむずかしい問題にぶつかると, かんたんに投げだしてしまう傾向 がある.	achievement	2.74
12. つい家族の意見にしたがってしまう.	will power	3.74
13. 私は有能な可能性に富む人間である.	self-contempt	9.28**
14. 約束を守らないことが多い.	problem beh.	3.43
15. たとえそのことで将来損することがわかっているけど現在楽しいことな らしたいという.	self-control	5.42*
16. きびしい規則のもとで仕事をするのはにがてである.	achievement	4.89*
17. 規則やルールをまもらない人には絶対に注意をする.	will power	3.08
18. いつも人から期待されているよりも, 少しでもよく物事をやるように 努力している.	achievement	29.5**
19. 自分の目的達成のためには, 周囲の者が迷惑をうけてもやむをえない.	will power	32.76**
20. 私は何かができる人間である.	self-contempt	3.15
21. 大ぜいの人の前で話をするを考えただけでも, 気おくれする.	socialization	22.93*
22. 自分が失敗しても, 失敗は自分のせいではないと思う.	problem beh.	16.35**
23. いったん腹がたちはじめると, ものすごく怒る.	self-control	3.18
24. 困ったことや, いやなことがあると, ついなやんでしまう.	will power	10.31**

* $p < .05$ ** $p < .01$

loneliness, self-contempt...宮下・小林(1981), will power...宮野(1981), problem beh. ...問題行動診断テスト
socialization...So in CPI, responsibility...Re in CPI, achievement...Ac in CPI

どに正の負荷量をもっていた。また、一致係数からは分析Ⅰの社会性と自尊心の因子の両方に関係している。

因子2は、上記の4., 7. および、11. 何かむずかしい問題にぶつかると、かんたんに投げだしてしまう傾向がある、に大きな負荷量をもっていた。一致係数からは自尊心と意志力の両方の因子に関係すると思われる。

因子3は、19. 自分の目的達成のためには、周囲の者が迷惑をうけてもやむをえない、14. 約束を守らないことが多い、22. 自分が失敗しても、失敗は自分のせいではないと思う、などに大きな負荷量をもっていた。一致

係数も.87と大きく、社会性の因子であると思われる。

非行群の結果 非行群のデータのみをもとに相関行列を作成し、SMCを共通性の推定値とし、主軸法によって因子分析を行った。固有値は、3.33, 2.50, 1.72, 1.66, 1.45, 1.07, .85と減少し、5—6因子の間で落ち込みが大きく、かつ、5因子目でアルファ係数が.33で、かつ6因子目で.06であった。それで、因子数を5と定めて斜交ゼオマックス回転を行った。得られた因子間の相関は小さく、ほぼ独立した因子であった。収束しなかったが、ほぼ満足できる単純構造が得られた。結果

Table 2
Geomax rotated factors of whole subjects

Var.	Factor loadings		
	1	2	3
2	.57*	-.15	.12
19	.48*	.25	-.35
22	.42*	.18	-.25
14	.42*	-.02	-.29
21	.32	-.27	.12
23	.31	.22	-.00
12	.25	-.04	.09
10	-.22	.04	-.06
18	-.16	.14	.08
5	.12	-.64*	-.13
20	-.25	.55*	-.17
13	-.21	.53*	-.00
8	-.06	.52*	.06
1	.11	-.41*	-.23
6	.26	-.27	-.22
17	.08	.17	-.16
7	-.27	-.10	-.65*
4	-.10	-.13	-.62*
15	.22	-.07	-.47*
9	.23	.06	-.38
11	.25	-.21	-.38
3	-.17	.15	.23
16	.09	-.04	-.18
24	-.04	-.01	.07
Contr.	1.72	1.89	1.90

Correlations among factor scores

1	1.00		
2	-.07	1.00	
3	-.05	.03	1.00

* $p < .05$

は Table 5 に、また、分析 I の因子との一致係数は Table 6 に示した。

因子 1 は、14. 約束を守らないことが多い、2. どうせ私には何もできないのだから、社会のことなど思いわずらってみてもしょうがない、15. たとえそのことで将来損することがわかっていても現在楽しいことならたいいていする、に正の、20. 私は何かができる人間である、に負の大きな負荷量をもっていた。社会性と能力を記述する因子であると思われる。一致係数からは分析 I の因子 1 と類似していることが伺われる。

因子 2 は、24. 困ったことや、いやなことがあると、ついなやんでしまう、に正の大きな負荷量を持ち、20.

Table 3
Oblique geomax rotated factors of the non-delinquent boys

Var.	Factor pattern		
	1	2	3
20	-.68*	-.11	.05
13	-.61*	.00	-.06
21	.47*	.03	-.02
5	.46*	.24	.10
2	.40*	.11	.36
8	-.32	-.25	.08
12	.18	.09	.04
4	-.41*	.61*	-.01
11	-.07	.58*	.09
7	-.52*	.56*	.01
18	-.07	-.46*	.02
23	.18	-.40*	.24
10	-.13	-.35	-.08
6	.23	.31	.06
17	.03	-.28	.14
16	-.05	.15	-.05
19	-.17	-.03	.70*
14	.00	-.09	.59*
22	-.01	.00	.56*
15	-.16	.10	.40*
1	.18	.08	.36
9	-.19	.09	.34
3	-.20	.18	-.24
24	.04	-.07	-.10

Correlations among factors

1	1.00		
2	.34	1.00	
3	.20	.28	1.00

私は何かができる人間である、21. 大ぜいの人の前で話をするを考えただけでも、気おくれする、10. 自分をかなり犠牲にしても、老いた両親のめんどうをみるのが人の本当のつとめだ、などに負の因子負荷量をもっていた。弱気に関係する因子と思われる。

因子 3 は、8. みんないつも暖かい心で私をむかえいれてくれる、13. 私は有能な可能性に富む人間である、に負の、5. 私には本当に理解しあえる人はいない、に正の大きな負荷量をもっていた。一致係数からは分析 I の因子 2 と関係があることがいえる。

因子 4 は、19. 自分の目的達成のためには、周囲の者が迷惑をうけてもやむをえない、22. 自分が失敗して

Table 4
Congruence matrix of factors between whole subjects and non-delinquent boys

Whole subjects	Non-delinquent boys		
	1	2	3
1	.65	.46	.87
2	-.80	-.69	-.25
3	.14	-.52	-.58

Table 5
Oblique geomax rotated factors of the juvenile delinquents

Var.	Factor pattern				
	1	2	3	4	5
14	.69*	-.11	-.12	-.19	.03
20	-.60*	-.59*	-.21	-.30	-.16
2	.53*	.15	-.20	.24	-.23
15	.50*	.19	.23	-.32	-.21
11	.49*	-.41*	.00	-.08	-.18
9	.43*	-.39	-.14	-.31	.02
16	.35	-.31	-.10	.01	-.15
6	.23	-.06	-.03	.05	-.13
21	.20	-.57*	.08	.01	-.02
24	.19	.55*	.32	-.29	.25
10	-.12	-.54*	.38	.07	.06
23	.09	-.39	-.28	-.35	-.02
18	-.10	.29	.29	-.13	.22
8	-.08	-.09	-.76*	.07	-.08
13	.09	.11	-.67*	-.10	-.17
5	.04	-.08	.46*	.24	-.18
3	-.07	.23	-.33	.27	.11
19	.06	.11	.15	-.77*	-.18
22	-.10	-.11	-.07	-.66*	.20
12	-.05	-.20	.34	-.41*	-.07
1	.12	-.15	.14	.24	.00
7	-.17	.02	.05	.11	-.88*
4	.16	.01	.22	-.09	-.73*
17	-.10	.07	-.26	-.30	-.37

Correlations among factors

1	1.00				
2	-.24	1.00			
3	.05	-.13	1.00		
4	-.04	.03	.19	1.00	
5	-.03	-.07	.07	.20	1.00

Table 6
Congruence matrix of factors between whole subjects and delinquent boys

Whole subjects	Delinquent boys				
	1	2	3	4	5
1	.70	-.37	.01	-.46	-.11
2	-.38	.16	-.73	-.49	-.03
3	-.44	.31	-.08	.50	.76

も、失敗は自分のせいではないと思う、などに負の大きな負荷量をもっていた。分析Ⅰの特定の因子とは対応を見出せず、問題行動に関係する因子と思われる。

因子5は、7.よくないことだとわかっている、ついスリルに魅力を感じてしまう、4.友達からさそわれるとついよくないこともしてしまう、に負の負荷量をもっていた。この因子は分析Ⅰの因子3に関係をもち、意志力を記述するものと思われる。

考 察

分析Ⅰについて

分析Ⅰは、非行群、および、無非行群が同一の因子構造をもつと仮定して、一括したデータで分析を行ったものであった。その結果、社会性、自尊心、意志力の3つの因子が取り出された。因子得点の比較の結果は、3つの因子とも非行群と無非行群の差を記述していた。すなわち、非行群は反社会的で、自尊心が低く、意志薄弱の傾向があった。得られた因子の内容は、共通の質問項目が6つしかなく、方法も異なっているにもかかわらず、宮野（1981）の社会的自己、意志、自己評価の要因と類似していた。本分析でも、非行に走る青少年が反社会的な自己概念をもち、自尊心が低く、意志薄弱である、という点については類似の結論が得られた。

刑務所に収容されている犯罪者では、CPIの項目のうち、特に、Re（責任感）、So（社会的成熟性）の尺度の得点が低いという傾向（Rudoff, 1969）を本分析でもほぼ裏づける結果となっており、これは非行少年のパーソナリティが刑務所の囚人と類似した傾向をもつことを示している。本分析の非行群は、非行化傾向が進行しているが、早期改善の見込みがあるとされている者であり、もっと非行の進行した非行群を用いれば、類似性はさらに明確になると思われる。

分析Ⅱについて

分析Ⅰでは非行群、無非行群が同一の因子構造をもつと仮定して分析を行ったが、両群の因子構造が同一であるという保証はないし、直交因子である必要もないので、この分析を行った。予想したとおり、無非行群では3つの因子が、非行群では5つの因子が取り出され、少

Table 7
The best matching solution of
non-delinquent boys

Var.	Factor loadings		
	1	2	3
1	.43	.13	.11
2	.63	.01	.14
3	-.18	-.01	-.26
4	.09	.33	-.50
5	.59	-.17	-.05
6	.43	-.05	-.15
7	-.01	.40	-.47
8	-.38	.21	.16
9	.14	.34	.04
10	-.40	-.03	.20
11	.41	.19	-.38
12	.23	-.07	-.02
13	-.52	.33	-.13
14	.33	.36	.30
15	.21	.37	.07
16	.03	.02	-.14
17	-.08	.03	.26
18	-.36	-.01	.31
19	.31	.55	.27
20	-.57	.42	-.02
21	.38	-.29	.05
22	.36	.36	.22
23	.02	-.01	.41
24	-.08	-.10	.02

Table 8
The best matching solution of
delinquent boys

Var.	Factor loadings		
	1	2	3
1	-.00	-.34	.03
2	.24	.01	.10
3	-.33	.23	-.18
4	.45	.15	.57
5	-.06	-.41	.34
6	.21	-.07	.05
7	.22	.38	.51
8	.11	.52	-.48
9	.67	-.18	-.22
10	.09	-.59	-.03
11	.65	-.32	-.03
12	.30	-.12	.18
13	.24	.61	-.26
14	.60	-.17	-.07
15	.46	-.02	.40
16	.46	-.19	-.08
17	.29	.55	.07
18	-.29	-.04	.18
19	.50	.34	.27
20	.23	.24	-.33
21	.43	-.46	-.16
22	.30	.22	-.19
23	.52	.10	-.31
24	-.17	.03	.32

なくとも非行群の因子2（弱気）と因子4（問題行動）は無非行群に対応するものを見い出せなかった。

以上の分析では非行群と無非行群の因子構造がどの程度一致するのか不明であるので、Cliff (1966) の方法に基づき、それぞれの主因子解をもとに最適解（best matching solution）を求め、一致係数を算出した。結果を Table 7—9 に示す。非行群の因子1と無非行群の因子2が弱い関係をもつが、3因子空間では因子の共通性を仮定できないと思われる。

要 約

本研究の目的は宮下・小林 (1981)、宮野 (1981) の代表的な質問項目に CPI の社会的成熟性、責任感、順応的な成就欲求の項目を追加し、非行少年と普通少年の意識の差異を見出すことであった。非行群は少年院で矯正処遇中の男子 41 名、無非行群は男子高校生 86 名であ

Table 9
Congruence matrix of the best matching
solutions between delinquent and
non-delinquent boys

Non-delinquent	Delinquent boys		
	1	2	3
1	.39	-.42	.35
2	-.63	.44	-.08
3	-.35	.08	-.34

った。60 項目からなる質問紙を実施したところ、24 項目に 10% レベルで有意差が認められたので、以後の分析に使用した。

分析 I では 24 項目の主軸法による因子分析、ゼオマックス回転を行った。3 因子が抽出され、それぞれ社会性、自尊心、意志力の因子と命名された。被験者の因子

得点を求め、分散分析を行ったところ、非行少年は反社会的で、自尊心が低く、意志薄弱の傾向があると結論された。

分析Ⅱは両群の意識構造の特徴を明らかにするために、24項目の主軸法による因子分析、斜交ゼロマックス回転を無非行群、および、非行群ごとに行った。無非行群では3因子、非行群では5因子が抽出された。非行群にのみ見出された因子として、問題行動と弱気があった。2群の因子構造を一致させるべく、Cliff (1966)の方法に基づき最適化解を求め、一致係数を調べた結果、3因子空間では類似性が低いことが分かった。

引用文献

- 青木邦子 1980 非行少年の負の情緒(Ⅳ) 犯罪心理学研究, 16, 1-20.
- Burt, C. 1938 *The young delinquent*. London: University of London Press. (Gibbons, D. C. 1976 *Delinquent behavior*. New Jersey: Prentice-Hall. p.76 より引用).
- Cliff, N. 1966 Orthogonal rotation to congruence. *Psychometrika*, 31, 33-42.
- ヒューリー, H.・ブロンナー, A. F. 樋口幸吉訳 1956 少年非行 みすず書房
- (Healy, H., & Bronner, A. F. 1936 *New light on delinquency and its treatment*. New Haven: Yale University Press.)
- Heise, D. R. 1969 Some methodological issues in semantic differential research. *Psychological Bulletin*, 72, 406-422.
- 宮野祥雄 1981 非行少年の自己概念——Q-テクニクによる分析—— 教育心理学研究, 29, 10-19.
- 宮下一博・小林利信 1981 青年期における“疎外感”の発達と適応との関係 教育心理学研究, 29, 297-305.
- Rudoff, A. 1969 A measure of casework in corrections. Unpublished manuscript, Center for Interdisciplinary Studies, San Jose State College.
- (Laufer, W. S., Skoog, D. K., & Day, J. M. 1982 Personality and criminality: A review of the California Psychological Inventory. *Journal of Clinical Psychology*, 38, 562-573. より引用)
- 芝 祐順 1979 因子分析法 東京大学出版会
- 上田敏見・玉瀬耕治・相崎戦太郎 1967 非行少年と普通少年の自己概念の比較 臨床心理学研究, 6, 164-170.

——1984. 5. 14. 受稿, 1985. 9. 14. 受理——